「伝統医療」の力の保証

――北カメルーン、ポリの事例を通して――

神　谷　良　法

はじめに

本稿では、カメルーン共和国北部州ポリにおける「伝統医療」の現状がいかなるものであるかを記述する。そのうえで、「伝統医療」の力を保証するものとその背後にある社会状況について検討する。ここでは「伝統医療」と便宜上括ってしまっているものが、実際にはいかに多様性に富んだものであるかということを明らかにすることが第一の目的となる。そして、このようなローカルな医療行為のあり方が地域の社会システム、国家の保健システムなどと相互作用しながら築き上げられていっている様子を明らかにする。

1）視点

所謂「伝統医療」という存在は、ある民俗世界の世界観、象徴的思考をどのように捉えるかという文化人類学者たちの好奇心を満たすものである。これは、エヴァンズ＝プリチャード（2000［1937］）の時代から近年まで続いてきた潮流である。現地の人間が病気や不幸といった出来事をどのように捉え、対処しているのかといった災因論（例えば、長島 1987）、治療法や病気の分類論（Turener 1967、掛谷 1978、および吉田 1990等）や民俗的身体観（河合 1998）のごときを見れば、この分野が文化人類学者たちの好奇心を常に満たしてきた存在であることは明らかであろう。

しかし、先に例としてあげてきた一群の研究に対しては、一つの問題点を指摘せねばならない。これらは全て○○族の知識として語られているものなのである。しかしながら、現状はどうであろうか。筆者が調査を行なったのはアフリカ大陸である。かつて「未開」や「部族社会」といったレッテルを貼られてきた地域で

あるアフリカであるが、少なくとも現在では、移住や情報化社会の進展によって、かつてのレッテルは有名無実なものとかしている。このような現在、○○族の知識という観点からだけで、「伝統医療」といったものにアクセスすることは大変難しいといわざるを得ない。

一方、近年、このような○○族の知識とは異なる方向からのアプローチ（たとえば、Comaroff and Comaroff 1993、Geschiere 1997等）がある。モダニティ論として総称されるこれらの論は、アフリカの妖術現象（これは、しばしば「伝統医療」と結びついてくるものである）のような従来「伝統」的なものとしてのみ捉えられがちであったものをグローバル化した世界との相互作用として捉え、「伝統」／「近代」というような枠組から抜け出そうと試みるものである。彼らは、近年のアフリカにおける妖術現象の再興とでも呼ぶべきものを、近代世界に対する適応の結果として捉えた。これによって、妖術イコール伝統という強固な固定観念を打ち崩すことに成功した。

本稿では、このようなモダニティ論の視点を援用し、「伝統医療」の現状を考察していく。「伝統医療」の実践の現状を描き、その背景に社会状況を考察していく。「伝統医療」の力の保証の方法を記述していくことによって、様々な試みがあることが明らかとなるであろう。

1、調査地と調査対象

1）ポリ

筆者が調査を行なったのは、カメルーン共和国北部州（Province du Nord）ファロ県（Département du Faro）ポリ郡（Arrondissement du Poli）ポリ（Poli）市内とその周辺部においてである。気候はサバンナ気候、一年は乾季（10月半ば～４月）と雨季（５月～10月半ば）に二分され、2002年度の年間降水量は1496ミリである。

周囲を山地に囲まれたポリ地域では、雨季には山間部から沖積層が流されてくるため土壌は肥沃であり、平地ではトウモロコシ、ソルガムを中心とした農業が行なわれている。山地に続く斜面では牛を中心とした牧畜が行なわれている。牧

畜に関していえば、市内平地でも羊、山羊、鶏といった小型家畜が飼育されている。

ポリは市内に4773人、郡全体では24821人の人口（1987年度国勢調査による）を擁する。この人口のうち、大半を占めるのは元来、現在の市内の周辺部に居住していたドワイヨという民族である。他にチャンバ、フルベ、ドゥパ、ヴォコ、コルビラと言った民族が居住するいわば多民族共生都市である。言語は公用語としてフランス語、北部州一帯のリンガフランカとしてフルベ語（*fulfulde*）が使用されている他、各民族はそれぞれ固有の言語を使用する。

先述のような多民族共生都市となったのは、この都市の成立状況によると考えられる。この都市の成立は、1907年のドイツ植民地時代と比較的新しい。ドイツは1925年にドワイヨの反乱を鎮圧したというが、現在、この地の人口の大半を占めるドワイヨは、このとき平地への定住を拒んだようである。このことは、この地に存在する「伝統」王国[1]の成立事情から明らかである。この地に王国が成立したのは、1939年、フランス植民地時代のことである。フランス植民地政府は平地への定住を拒むドワイヨを中心とする「異教徒」の説得を、ガルア（北部州州都の大都市）のイスラム教師に依頼し、このイスラム教師が王国を建国することになったという[2]。王国の成立がフランス植民地政府に咎められることがなかったことは、この王国が、当時植民地政府が用いた間接統治政策の産物であったことを示している。

この地における現在の主要宗教はイスラム教とキリスト教である。キリスト教ミッションがこの地に入ったのは、王国成立の後であり、現在でもムスリムは市街中心部に多く、郊外に行くにつれてキリスト教徒が多くなってくる。なお、キリスト教徒はムスリムに比べ、かつての伝統宗教の名残を残している[3]

現地調査は、2002年7月から10月および、2003年5月から9月にかけて行なわれた。調査においては、伝統医療従事者への聞き取りと直接観察を中心とした。聞き取りに当たってはフランス語を使用し、相手がフランス語を解さない時は通訳を用いた。

2）ポリにおける治療行為

ポリの治療行為を概観すると下の表のようにまとめることが可能である

	近代医学に基づいたもの	近代医学に基づかないもの
専門職によるもの	①近代病院での治療行為	②伝統医療従事者による治療行為
非専門職によるもの	③売薬を用いた自己投薬行為	④薬草を用いた自己投薬行為

①に関しては、ポリには2名の医師が勤務する公立病院がある。県内で医師資格を持つものが勤務しているのはここのみであり、県内他地域にある診療所に勤務しているのは医師ではなく看護師である。2名の医師のうちの1人は2002年秋より、公立病院勤務のほか、私設の診療所を開業している。

②に関しては、2003年9月現在、市内に4名の伝統医療従事者の活動を確認している。これに関しては次項で詳しく述べる。

③については、市内に一軒薬局がある他、雑貨屋や市場の露天で薬を購入することができる。薬は箱ごとではなく、例えば錠剤ならば一錠単位で売られている。薬は筆者が確認した限りでは隣国ナイジェリアやアジア諸国で生産されたものである。これらの薬は消費期限が切れているないしは、そもそも消費期限が記載されていないものがほとんどである。

④に関しては、筆者は現在のところ多くの情報を持っていないが、この地の人々は伝統医療従事者に限らなくとも、ある程度の薬草の知識を持っている者が多いようである。調査助手によれば、黄疸に効く植物などは採集してきても、剥きだしで所持していると、出会う人毎に求められて家に帰り着くまでにはなくなってしまうのだという。

以上に述べたのが、ポリにおける治療行為の概観である。この地域では近代医療を利用することも十分可能である。

3）ポリにおける伝統医療従事者

ポリ市内で伝統医療に従事している人間は、先述のように2003年時４名存在した。

伝統医療に従事している人間は、フルベ語では*mallum*と呼ばれる。これはイスラム教師（Fr :marabout）をあらわすのと同じ単語であるが、イスラム教師とは同一の存在ではなく、フランス語ではguerriseur（治療者）、tradi-praticien（直訳するならば伝統実践者ぐらいか）と呼称される。ポリで活動している４名に共通する特徴を抽出すると、彼らは薬草や儀礼を用いて、治療行動を行なう人間であるということができる。

以下では本稿で詳しく扱う二名について詳述する。

①ＳＭ

1968年生まれ。隣国ナイジェリア出身。伝統医療従事者である父に幼少時より師事。父はメッカ巡礼者をあらわすハッジの称号をもつ。ポリでは二年ほど前より治療活動を行なっている。父がフルベであり、フルベを自称しているが、ナイジェリア出身であること、ハウサ語をよく話すことため、ポリの住人からはナイジェリアに多数居住するハウサだと思われている。ナイジェリア政府発行の伝統医の証明書[4]を持つ。使用する薬は父や父から与えられた書物によって学んだものが全てで、自分で新たに発見したり、新しい組み合わせを試みることはしないという。

ポリの伝統医療従事者の中では一番の新参者であるが、最も力を持っているとされる。一方、金を掠め取ろうとする詐欺師であるという評判もまたよく聞かれる。彼はまた奇行が多い人物ともされているようである[5]。

②ＳＤ

1968年生まれ。ポリ郡の隣に位置するベカ郡出身。ベカ郡に多く居住する民族チャンバである。15歳のときより、伝統施術者であった父に師事し修行を開始、25歳のときより働き始める。AS.PRO.ME.TRAD.CAM（Association pour la Promotion de la Médecine Traditionelle du Cameroun、カメルーン伝統医療推進協会）に所属する。使用する薬については、学んだもの以外にも「科学的実

験」で新しい調合を発見しようと試みているという。 ポリ王国の貴族（notable）になりたいという希望を持っており、毎週金曜に行なわれるイスラム教の大礼拝時には必ず、王宮まで出向いている。

2、伝統医療従事者の説明に見る病

本節では、伝統医療従事者に行なった聞き取りを中心にポリにおける病因を記述する。ポリにおける病は、その原因に超自然的な力が関わっているか否かで大きく二分することができる。

(1) 超自然的な力の介在する病

①超自然的存在によるもの

フルベ語で*ginnawol*ないしは*heendu*と呼ばれる超自然的存在が病因の病の一群がある。*ginnawol*、*heendu*という存在については、フランス語では être surnaturel すなわち超自然的存在であると説明される。主に野山や原野といった人気のないところを夕暮れから明け方まで徘徊するもの、すなわち人間とは正反対の活動時間、活動場所を持つ存在とされる。彼らは遭遇した人間にとりつき病気をもたらすという。また、野山や原野の薬用植物はおしなべて彼らの管理下にあるという。

さて、この超自然的存在の姿形については伝統医療従事者によって説明が異なるが、超自然的存在によってもたらされるとされる病気については一致している。彼らに取り付かれた犠牲者は異常行動を取るようになり、大人数でも押さえつけるのが困難なほどの怪力を発揮するようになるという。また、他にもポリオや癲癇は超自然的存在によってもたらされるという。

②妖術

他に超自然的な力が原因とされる病としては、妖術（Fl：*kaaramajo*、Fr：sorcellerie）があげられる。妖術の犠牲者は、外傷が全くないにも関わらず、全

身の痛みに悩まされ、やがて死に至るという。これは妖術師（Fl :*kaaramaku*, Fr :sorcier）が夜中に被害者の血を食らっているためであるとされ、病院では原因不明としか診断されない。

この妖術を使う妖術師は、使魔を使う、自身を動物の姿に変身させるといったことができるとされ、その姿も大きな翼を持っていると言われる[6]ように、明らかに常人とは異質なものとして表象される。

以上にあげた妖術と区別されて述べられるものとして「針の妖術」とでも言うべきものがある。これはフルベ語で針を意味する *batal* という言葉が当てられている。原因は加害者が針の妖術を用い、犠牲者のもとに針を飛ばしているからだという。この妖術によって飛ばされた針は、犠牲者の身体を知らぬ間に刺し、全身の痛みを与え、やがて死に至らしめるのだという。原因はこのように異なるが、症状は同じであり、病院では原因不明と診断される点も同様である。

他に同一家族内でのみ有効な妖術も存在し、これもまた原因不明の全身の痛みをもたらすが、死に至らしめることはないという。

2）超自然的な力の介在しない病気

病気の全てが超自然的な力の介在によって起こると信じられているわけではない。病気の大多数は「自然な」原因で起こるとされている。この「自然な」原因には、汚れや細菌など様々な説明が含まれるが、伝統医療従事者によってその説明の仕方は異なってくる。この点については、次節で詳述する。

3、伝統医療従事者の力を保証する二つの戦略

1）病気の説明に見る差異

ＳＤとＳＭ、二人が行なう病気に関する説明を比較してみると、それらからは明白な差異を見て取ることができる。本節ではこの差異から、二人の治療における戦略の違い、力の保証の仕方の違いを見出す。

①ＳＤの行なう病気の説明

ＳＤは前節(1)で概観した超自然的な力、とりわけ超自然的存在について詳しい説明を行なわない。彼によれば、超自然的存在の姿を自分たちは見ることが出来ないのだから、姿について説明を行なうことはできないのだという。超自然的存在は彼の説明の中では常に*ginnawol*でしかない。

一方、自然原因として概観した病気に関しては、彼は豊富な医学用語を駆使して説明する。例えば、淋病、虫垂炎、ガングリオン、フィラリア、住血吸虫病、腸チフス、甲状線腫、脊椎カリエス等を俗語ではなく、（綴りを間違えることはしばしばあっても）医学事典に載っている言葉と全く同じもので述べる。ただし、医学事典[7]に照らし合わせてみると、必ずしも事典の症状と彼の説明する症状が一致しないこともあり、近代医学の観点から言えば、彼の医学知識は正確なものではない。自然原因の病気の詳しい病因に関しては、アメーバ、細菌等の説明を行なうが、これも近代医学の観点から言うと、常に正しいわけではない。また、これだけの医学用語を知っているならば、ポリオのような保健省が根絶のためワクチン接種プログラムを行なっている病気に関しては、近代医学的な説明を行なってもよさそうなものであるが、彼は超自然的存在が原因であると説明を行なっている。このことからも単に近代医学を猿真似しているだけというわけではないと考えられる。

②ＳＭの行なう病気の説明

ＳＭは超自然的存在に関する説明を豊富に行なう。ＳＤが超自然的存在に起因する病気としてまとめた異常行動に対して、ＳＭは、どのような異常行動を取るかによって、さらに細分化して説明を行なうことができる。また、彼は超自然的存在のいくつかとは契約を交わしており、これを使役することができると言う。

一方、自然原因の病気に対して、彼は自然なものだとだけ答え、詳しい原因は自分にはわからないと答える。原因を説明するのではなく、治すことが自分の仕事であるからわからなくても良いのだと答えるのである。

2）異質なる力――ＳＭの戦略

ＳＭが自分の治療者としての力の誇示に用いているのは、自らの異質性である

と考える。今まで記述してきたことをこの異質性というキーワードに基づいて整理してみよう。

まず、彼はカメルーン人ではなく、ナイジェリア人である。そして、本来多数派民族の一部であるフルベであるにもかかわらず、外来者なおかつ多数派民族ではないでハウサであると街の人間に誤解されている。彼自身はその誤解を解こうとはしない。ハウサかと問われたらそれを肯定するだけである。いうなれば、彼は二重の意味で異人である――外国人でありなおかつポリでは少数派の民族――ということができる。さらに付け加えるならばポリにおいて、隣国ナイジェリアは伝統医療先進国として語られる[8]。自分たちが知らない力を多く持った異邦人という表象。ここに異質性はさらに増す。

また、彼は先に述べたように奇行の多い人物とされている。そして、常人ならば忌避するはずの超自然的存在と契約し、使役していることを隠さない人物でもある。妖術を行なう人間はしばしば規範から逸脱していると言われる[9]。ＳＭもまた規範から逸脱した人物であるということができる。

このようにみてくると、ＳＭの異質性というのは、規範から逸脱した妖術師と表裏一体の関係にあるといえよう[10]。妖術に通じる異質性を持つことで、力を持っていることが保証されていると考えられる。

３）異人性の放棄と模倣という戦略――ＳＤの場合

異質性を強調するＳＭに対して、ＳＤはこのような戦略を取らない。まず、この点の背後にあるものについて考察していこう。

ＳＤは王国の貴族になることを望んでいる。しかしながら、前項末に述べたように、伝統医はしばしば妖術師と表裏一体の関係にあると考えられてきた。これは、伝統医としての力が強く認識されればされるほど、社会の中のアウトサイダー、危険分子として認識される危険性を常に秘めていることを意味する。つまり、異質性を強調し、超自然的存在との親和度を強調することは、彼が理想とする地位を獲得することを困難にすることを意味する。したがって彼はＳＭのような方法で自分の力を保証することを諦めねばならない。実際に彼はカメルーン伝統医療向上協会からの質問に対し、妖術師と同一視される危険性のある項目を全て否定

している[11]。

危険性と表裏一体の力というものを放棄したとき、彼は新たなる力の保証を必要とすることになる。彼にとって、それは近代医学であり、それゆえ彼は近代医学の模倣ないしは近代医学知識の取り込みに向かったのではないだろうか。

模倣という概念について、タウシグは単なる猿真似ではなく、西洋とローカルな世界との接合領域で新たなるものを創造する行為として積極的に評価している(Taussig 1993)。病気の説明のところでも述べたことであるが、ＳＤの行為も単なる猿真似ではなく、近代医療とも従来の「伝統医療」とも違う新たなるものの創造として捉えることが可能であろう。ＳＤは近代医学を模倣しながら、その力を取り込み、なおかつ、近代医療の劣化コピーではない新たなる「伝統医療」を創造しているのである。

4）力の保証の二つのあり方と現代社会

まず、これまで論じてきたことをまとめてみよう。

ＳＭは妖術師と表裏一体のような関係にある。規範から外れているゆえに、常人の知らない知識に通じている。これは従来から存在する伝統医療従事者についてのイメージと変わらない。

これに対し、ＳＤは、このような従来の伝統医療従事者のイメージとは少し異なる。彼は近代医学を模倣することによって、伝統医療従事者について回るある部分での負のイメージからは少なくとも表向きは解放されているようである。

ところで、現在、アフリカ諸国では伝統医療の知識、とりわけ薬草知識を知的資源として積極的に評価しようとする動きが国家レベルでみられる。カメルーンでも、国立ヤウンデ大学において伝統医療で用いられる薬草の研究が行なわれてきているようである。また、2003年８月には北部州の州都ガルアにて伝統医療従事者たちの集会とパレードが行なわれており、保健省もこれに場所を貸す等協力を行なっていた。

このような「伝統医療」の再評価がＳＤのような伝統医療従事者の模倣を手助けするのではないだろうか。あるいは、ＳＤのような「科学的実験を行なう」というような「伝統医療従事者」の存在がこのような動きを促進しているというこ

とも可能であろう。実際に先の集会で第一人者としてスピーチを行なっていたのは医師との協力のもと、薬草の図鑑を作成したという有名な伝統医療従事者であった。カメルーンにおける近代医学と伝統医療の関係は、日本における近代医学と東洋医学の関係のごとく、相互に影響を及ぼしつつ、共存の時代に入りつつあるといってよい。

そして、このような状況がＳＭのような従来的な伝統医療従事者にも有利なものとなっていることも指摘せねばならない。「伝統医療」の変容は、伝統医療従事者の負のイメージ、すなわち、妖術師と同じような存在という部分を消し去ることに成功しているのではないかと、前項で指摘した。このような状況の中でいまだに伝統医療従事者の負のイメージを担い続けることは、近代医学では決して解決できない妖術や超自然的存在に対するスペシャリストとしての伝統医療従事者の力を強固なものとしているのではなかろうか[12]。逆説的であるが、これも「近代」によって「伝統」が強固なものとされている一例であろう。

おわりに――二つの「伝統医療」のあり方、

本稿では、二人の伝統医療従事者の比較から、「伝統医療」の現状と多様性を報告するとともに、「伝統医療」を多様なものにしている諸要因を、近代医学の普及、「伝統医療」の国家レベルでの見直しの動き、地域社会における社会階級や国境の問題など様々な観点から明らかにしようと努めてきた。そして、ＳＤのような新たなるタイプの伝統医療従事者と近代医学の相互作用があることを論じ、それがまたＳＭのような従来型の伝統医療従事者の力の保証にも作用してきていることを論じた。本稿でみてきたように「伝統医療」の現状はさまざまな影響が相互に錯綜し、近代医学と共存しつつ、お互いの立場を強化しあっている。この錯綜した状況を安易に一般化、簡潔化せずに、錯綜を認めたまま記述していく作業がこうした状況下の民族誌記述には必要であろう。

1　後の記述から明らかになるように、ポリ王国は、植民地化以前から存在していた所謂伝統王国ではない。しかしながら、その形態が伝統王国の形を持つため、ここでは便宜上「伝統」王国として記す。

2　ポリ王国の王（Fl:laamido）からの聞き取りによる。
例えば、現在でもキリスト教徒のドワイヨは野山に行き、割礼の行事を行なう。この際、割礼される子供の母親は頭を剃るという。これが異教徒と同じだとして、筆者が居住していた家の第一夫人（ムスリム）と使用人の女性（キリスト教徒）との間で論争になっていた。

4　なお、カメルーンでは、ナイジェリアとは異なり、政府は伝統医療従事者に政府公認の証明書を与えることはない。

5　自分の力を誇示するためか、かつて妖術師告発を衆人環視の元で行なったという話が聞かれる。また、筆者はある日、目の前で剃刀の替え刃をばりばりと食べているところに出くわしたことがある。そのとき、替え刃は薬だと彼は主張していた。

6　この妖術師の表象については、ポリ近郊のドワイヨの村落で調査を行なったバーリーも同様の報告をしている（Barley 1980）。

7　調査地には*Dictionnaire des Termes de Médecine 27e edition* (Maloine, 2002)を携行した。

8　調査中、複数の人間からナイジェリアに行ったほうが良い、あちらではライオンを連れた怪しげな伝統医療従事者がたくさんいるからというようなことを忠告された。

9　この規範の逸脱には「あべこべ人間」（長島 1987、p.128）と言われるような逆転のシンボリズムも含まれる。彼が逆転した行動の一例としては、注5で述べた剃刀の替え刃を食べるような行動――すなわち、人間が口にしないはずのものを口にする――があげられる。

10　このイメージについては、注９も参照のこと。

11　ＳＤが所持していたAS.PRO.ME.TRAD.CAM入会時の質問項目によると、妖術と関わりのあると考えられる質問が5つある（尚、質問は全21項目にわたる）。すなわち、1）呪いのかけ方を知っているか、2）贋金を作るか、3）竜巻を誰かに飛ばすことができるか、4）物や人を何らか他のものに変える術を知っているか、5）全ての武器や刃物に対して装甲をはる術を知っているかの5項目である。ＳＤは全ての質問にいいえと答えている。
また、AS.PRO.ME.TRAD.CAMからの質問項目の実に四分の一近い部分がこのような妖術と関連すると考えられるもので占められていることは、伝統医療従事者の両義性を端的にあらわしているともいえよう。

12　このようなスペシャリスト化は患者層からも明らかである（下記表を参照）。ＳＭは明

らかに超自然的存在に特化した存在となっているようである。

患者の内訳

施術者名	S M		S D	
	件数	割合	件数	割合
①超自然的力によらない病気	3	21.4%	26	78.8%
②怪我	1	7.1%	2	6.1%
③悪習による病気	1	7.1%	0	0%
④超自然的力による病気	9	64.2%	3	9.1%
⑤病気以外	0	0%	3	9.1%
合計	14		33	

（2003年、伝統医療従事者への聞き取りから筆者作成）

参考文献

掛谷誠 1978
「シコメロの素材と論理――トングウェ族の動物性呪薬」『アフリカ研究』17　pp.1-33
河合香吏 1998
『野の医療　牧畜民チャムスの身体世界』、東京大学出版会
長島信弘 1987
『死と病いの民族誌　ケニア・テソ族の災因論』、岩波書店
吉田憲司 1990
「チェワ族の「薬」――動植物利用の一段面――」『国立民族学博物館研究報告別冊』12、pp.127-237
Barley, N. 1983
Symbolic Structures: an exploration of the culture of the Dowayos, Cambridge, New York, Cambridge University Press, Paris, Editions de la Maison des sciences de l'homme
Comaroff, J and J, Comaroff (ed). 1993
Modernity and Its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa, Chicago,University of Chicago Press.
Geschiere, P. 1997
The Modernity of Wtchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa, Richmond, University Press of Virginia.

エヴァンズ＝プリチャード, E. E. 2000 (1937)
『アザンデ人の世界　妖術・託宣・呪術』、みすず書房（*Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*, Oxford, Clarendon Press）
Taussig, M, 1993
Mimesis and Alterity : A Particular History of the Senses, New York, London, Routledge.

Garnier,M. et al(eds). 2002
Dictionnaire des Termes de Médecine 27e édition, Paris, Maloine.
Parietti, G.
Dictionnaire Français-Foulfouldé and Index Foulfouldé, Guidiguis, Mission Catholique.

（かみや　よしのり　文化人類学）